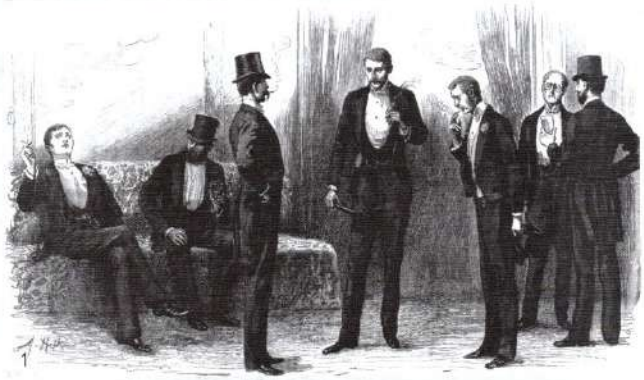
伝統を脈々と受け継ぎながら、時代の変化とともに解釈も変わってきたドレスコード。歴史的背景やジェンダー的視点から、ブラックタイを再考する

〝ブラックタイ〟とは何なのか?

教えてくれたのは… 中野香織さん

服飾史家、作家。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て、明治大学特任教授、昭和女子大学客員教授を務めた。ファッション史から最新のモード事情まで幅広く研究し、執筆や講演を行う。



19~20世紀 —

1 19世紀の西洋の社交場。白いボウタイを合わせる燕尾服にトップハットが夜の正礼装だった **2** ホワイトタイ指定の音楽会に出席するエリザベス女王とフィリップ殿下。ジュエリーとサッシュがドレスによく映えて **3** 20世紀前半に活躍したミュージカルスターのフレッド・アステア。タキシードを軽やかに着こなすスタイルは、今も色褪せない **4** 映画『007』のジェームズ・ボンドのタキシード姿は、世界的なアイコンに **5** 男女二人での参加が基本だった20世紀の社交シーン。ブラックタイ指定のパーティに出席するクリント・イーストウッド夫妻

社交を円滑に進めるために生まれた男性社会を象徴するドレスコード

——紳士のドレスコードであるブラックタイは、どのようにして生まれたのでしょうか。

「そもそもドレスコードというものが成立したのは、19世紀半ばのイギリス(1)。産業革命を経て、中産階級が貴族階級に交じって政治や経済の世界で頭角を現すようになった頃です。それまでの階級制が揺らぐ一方、服装で身分がわかる時代でもありました。異なる階級の人たちがいくら対等な立場で社交の場を共有しても、服装の違いが心理的な分断を生み、スムースな意思決定を阻害してしまいます。服装で差別されないというのはとても大事なこと。次第に、出自や資産に違いのある人たちとの社交を円滑に進めようという空気ができ上がり、階級にかかわらず対等に敬意を表し合うようにするために、ドレスコードが作られました。

ドレスコードは昼と夜で異なり、それぞれ正礼装・準礼装・略礼装と分かれています。もともと夜の正礼装では燕尾服を着用するのが決まりでした。タキシードは夜の準礼装という位置づけ。ディナーの後、紳士たちが別室で煙草を吸いながらくつろぐ際に着ていた服が原型です。タキシードがスモーキングジャケットとも呼ばれるのは、そんな背景からです。

19世紀後半に民主化が進行すると、イギリスとアメリカでカジュアル化の動きが進みます。当時のイギリス皇太子エドワード7世や、NYの社交場・タキシードパークを主宰するグリズウォールド・ロリラードがルールブレーカーとなり、燕尾服の裾を切り落としたジャケットを社交場で着用し始めました。それがもてはやされ、次第にタキシードが正礼装のように扱われるようになったんです。以降、タキシードスタイルをブラックタイ、最正装の燕尾服をホワイトタイ(2)と呼び分けるようになりました。

ドレスコードは、場の「格」を保って敬意を示すという意味では非常に便利です。暗黙のルールとして知っておかなければならないものですが、絶対に守られるべき法律でもない。だからこそセンスが問われる領域だと思います。特にアメリカでは、ルールに則りながらも自然体で着崩す人が粋だとされてきました。ブラックタイのお手本といわれたフレッド・アステア(3)は、新品のタキシードを壁にぶつけてクタッとさせてから着ていたという伝説があります。対して、イギリスを代表する正統派といえば、映画『007』('62~)シリーズのジェームズ・ボンドのスタイル(4)。今でも世界基準でタキシードの理想型と呼ばれています」

——男性と違って女性のドレスコードは曖昧ですが、それはなぜでしょう?

「ドレスコードは男性のために作られたものなので、女性は「男性に準ずる」とされてきました。たとえば王室の晩餐会のようなホワイトタイ指定の場であれば、女性は大ぶりのジュエリーや勲章の映える、デコルテの開いたイブニングドレスを。男性がブラックタイと指定された場合、女性はその時代のトレンドを反映したドレスを着て、男性に合わせる。そんなかたちで20世紀までは、西洋の正式な社交場には男女二人で出席するのが基本とされてきました(5)。女性だけ、男性だけでの参加はあり得なかったんです。

さらにもうひとつジェンダー的観点でいうと、社交の場で男性がみんな黒っぽい服を着ることで、隣にいる女性の美しさを引き立たせる役割を担っていたという側面もあります。男性は女性の引き立

BLACK TIE CHRONICLE

19世紀半ば
・イギリスで産業革命を経て
ドレスコードが誕生する
・燕尾服が夜の正礼装に

19世紀後半
・民主化が進行
・イギリスとアメリカを中心に
タキシードが燕尾服に取って代わる

1960s
・女性解放運動が活発化
・イヴ・サン=ローランが初めて
女性のためのタキシードを発表

1970s
・女性の社会進出が進む
・女性のパンツスーツが普及

1980s
・映画『アメリカン・ジゴロ』が公開
・ジョルジオ アルマーニの
ソフトスーツが社会現象に

2010s~
・ジェンダーフリーが加速
・ドレスコードも多様化の時代へ

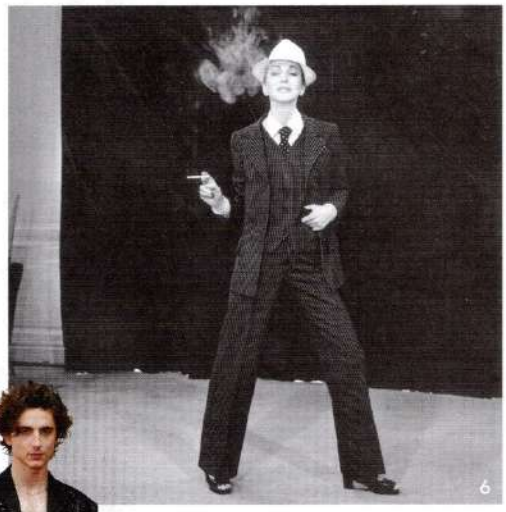
2023
・ヴァレンティノが
「ブラックタイ」コレクションを発表

10 VALENTINO

11 VALENTINO

2023—

10・11 「ブラックタイ」をテーマに掲げた、ヴァレンティノの2023-'24年秋冬コレクション。パンクなアティチュードとメゾンが得意とするエレガントなカッティングを組み合わせ、フォーマルウェアを再解釈した



6

1966—

6 イヴ・サン=ローランが、女性のためのタキシード「スモーキング」を発表。女性らしさが際立つ着こなしを提案し、女性のパンツスーツスタイルの先駆けとなった

9

8

2010s~—

8 ビリー・ポーターのタキシードドレス姿は「世界を変えた」と語り継がれるほどのインパクトをもたらした
9 ルイ・ヴィトンのセットアップを素肌に直接羽織り、セクシーな着こなしを披露したティモシー・シャラメ

7

1980—

7 映画「アメリカン・ジゴロ」で色気あるスーツを着こなすリチャード・ギア。時代を象徴する男性像に

て役、だけど実権を握っているのは男性。この関係性が、19~20世紀のドレスコードから見えるジェンダー観です。

ドレスコードは現代まで脈々と受け継がれてきましたが、時代とともに解釈も変わってきました。男女カップルでないと参加できないなんてルールは、今の時代は通用しませんよね。最近はタキシードを選ぶ女性も増えてきていますし、私も今仕立ててもらっているところです。一着持っていると一生着られますから。イギリスのヘンリー王子とメーガン妃の結婚式でも、タキシード姿で参列した女性がいたのが印象的でした」

時代と密接に関わるドレスコード。女性もタキシードを着る時代へ

——そういう意味では、1966年にイヴ・サン=ローランが女性のためのタキシードを発表した(**6**)のは先駆的でしたね。

「60年代半ば~70年代は、ウーマン・リブが盛んだった時期。サン=ローランが、ブラックタイ指定のパーティに着られる女性用のタキシードを作ったというのは、じつにエポックメイキングでした。ただ、当時はまだ前衛的な思想として受け止められていて、一般の女性たちは夜の正装よりも、普段のファッションにパンツスーツを取り入れるようになりました。70年代以降は女性もパンツスーツの時代になっていくので、その点でもサン=ローランの功績は大きいですね。

ちなみに80年代になると、マドンナのような女性性を強く打ち出す方向へとシフトしていくのですが、男性の装いもエレガントで官能的になっていきます。鎧のようなスーツではなく、きれいな色みのソフトスーツが一世を風靡しました。その火付け役となったのが、映画『アメリカン・ジゴロ』('80)でリチャード・ギアの衣装(**7**)を提供したジョルジオ アルマーニです。メンズスーツに革命を起こし、男性も色気があっていいんじゃないかと、時代のムードを変えました。

21世紀になり、ジェンダーフリーが加速する今、ドレスコードの考え方も多様化しています。2019年のアカデミー賞でビリー・ポーターがタキシードドレス姿を披露したように(**8**)、昔はタブーとされていたことが受け入れられるように。昨年のティモシー・シャラメのセクシーな着こなし(**9**)もそうですが、若い世代を中心にブラックタイを新たな解釈で表現する動きが出てきています」

——その流れの中で、今年ヴァレンティノがブラックタイを再考するコレクションを発表しました。

「長らく男性のシンボルとされてきたブラックタイを、女性も自由に取り入れていこうという社会的メッセージが込められていますね。労働者階級発祥のカルチャーであるパンクと、上流階級の象徴であるブラックタイを巧みにミックスした点は、西洋特有の文化格差を解消するための後押しと捉えることもできます。何より、『ブラックタイ』をコレクションのテーマに掲げたのが強いですよね。政治的ステータスや古いジェンダー観、階級格差や文化格差など、さまざまな問題を包含するモチーフをフィーチャーすることで、世の中に再考を促す、力のあるコレクションだと思います。

昨今のラグジュアリーブランドには、真善美の領域で何をよしとするか、本質的価値を示すことが期待されています。デザイン以外に、政治的、文化的観点も視野に入れて問題提起することが求められる中で、ヴァレンティノはそこをしっかり押さえているブランドであることが証明されたのではないでしょうか」

 interview & text: Eimi Hayashi photography: Getty Images